

享和中にも有りけんを、さる名を負せざりける歟いふがひもなく忘れたり、抑この一條は曩に北峯子のまゝるしつけたる、風の神の圖説の後につけてもいはまほしかるまゝに伊豆の千わきのわけなし言もて、科戸の風の神やらひしつ、銳鎌、八重鎌、刈りはらふごと、禿たが筆を走らせしみそぎやのやく體もなき、只是嗚呼のすさみになん、

咳病

○按ズルニ、古ク疫病ト稱スルモノ、中ニハ、流行感冒モ混ジタリ、又次條ノ咳病、傷風、熱氣ナド稱スルモノモ、多クハ感冒ヲ云ヘルナリ、

〔倭名類聚抄三〕嗽

病源論云、嗽亥走二音、嗽字亦作咳、之波不岐。肺寒則成也、

〔箋注倭名類聚抄二〕那波本束作走、按廣韻嗽、蘇奏切、屬心母、走則候切、屬精母、雖其音不同、並在五十候、作束似非是、然諸古本皆作束、類聚名義抄同、則作走者疑係那波氏校改、按說文、嗽、逆氣也、咳、小兒笑也、二字不同、後人變嗽字欠、從口、禮記內則、不敢噦噫、噫、咳、欠、伸、莊子漁父篇、幸聞咳唾之音、遂混咳兒字也、又說文、嗽、吮也、無嗽字、周禮疾醫、冬時有嗽、上氣疾、蓋借訓吮也、之、嗽字爲之、後從口也、故釋文云、嗽本亦作嗽、集韻同音有嗽字、云吮也、依訓即嗽字變欠、從口者、猶嗽作咳、已借嗽爲嗽、故又以嗽爲嗽也、按類聚符宣抄載、天平九年六月太政官符云、咳、嗽、志波不伎、新撰字鏡、嗽字、古本喘字、醫心方嗽字、咳字、並同訓、又之波不岐也、美、見源氏物語夕顏卷、今俗呼世岐、○中原書咳、嗽、候、作咳、嗽者、肺感於寒、微者則成咳、嗽也、釋名、嗽、刻也、氣奔至出入不平、調若刻物也、曲直瀨本標目作嗽、嗽、那波本標目正文皆作嗽、嗽、昌平本正文作嗽、嗽、按注云、亦作嗽、正文必不作嗽、山田本之作也、那波本同、似是、

〔伊呂波字類抄〕病加、咳、病、ガイヒヤウ、咳、嗽、咳、病、名也、

〔撮壤集〕病下、疾、嗽、嗽、咳、嗽、同字、

〔增補下學集〕支上、二、嗽、嗽、咳、病、咳、氣、咳、嗽、